上毛新聞　2000年（平成12年）4月7日（金曜日）　経済　（10）

道あの時、これから

素顔の企業人

多種多様な職業を経験

梅干し「カリカリ梅」の開発者として知られ、県漬物工業協同組合理事長、全日本漬物協同組合連合会常務理事を歴任、県漬物業界を長年にわたって牽引した。一九七七年一月に心筋動脈の難病「解離性動脈瘤（りゅう）」を発病して以来、後任に長男の信夫氏を立て、社業から一切身を引いている。「一病息災」の後、いろんなことがやれた。老後の招待状として（病気は）感謝している」と屈託のない笑顔をのぞかせる。

二百五年、新田郡笠懸村（現笠懸町）の農家の四男に生まれた。太平洋戦争の激化で、桐生工業学校を繰り上げ卒業、親元を離れ、軍服や軍帽などを作る陸軍被本廠（しょう）に勤めるなど多感な少年時代を戦争の中で過ごした。終戦後の四七年三月、桐生工業専門学校化学工業科（現・群馬大工学部）を卒業したが一終戦直後の混乱期で何をしていいかわからず、とりあえず実家の農業を手伝った。

三十歳で赤城フーズの前身「小田原園」に入るまでさまざまな職業経験を積んだ。

同専門学校の教授に東京農業の出身、また化学の知識を買いつけていたことから、農産加工に興味を持った。当時、隣の桐生市町では、収穫した大根を漬けるあんこ加工する農家が協同組合を作り、活発な事業が活況、翌年には農協も乗り出して、村全体に広がった。しかし教授が急逝。「この人がいなければ」と思った。大根の愛作家が、「あんこ加工」に挑戦、技術的に未熟なあんの売れ行きは悪化、大根の愛作家が過剰生産となったことも重なり、同組合は二年目で早くも休止を余儀なくされた。

たくあん加工農家に提案

（義姉加工）を近隣の有力農家に提案。四八年九月に岩農農産工業協同組合を組織化し、専務理事に就任した。

この試みは県内に成功した。手掛けた農家が大きな収入を手にすると村中の農家が注目、翌年には農協も乗り出して、村全体に広がった。しかし教授が急逝。「この人がいなければ」と思った。大根の愛作家が過剰生産となったことも重なり、同組合は二年目で早くも休止を余儀なくされた。

職を失い途方に暮れていた時、当時の県知事、松山琴次郎氏に行動力を買い込まれ、公民館長に抜擢され、「農産加工経験生かす」と題した講演を公民館で行った。

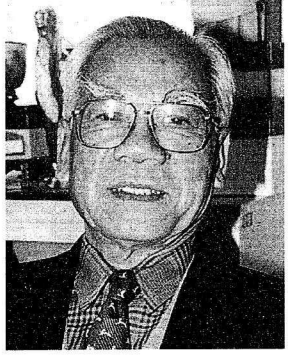
農産加工経験生かす

直面する将来の安心感も覚え始めると、就任四年目の五三歳で赤城フーズの前身「小田原園」を設立し専務に就任した。「過去の農産加工経験が役に立ち、技術的な不安はなかった」という。

同社は未経験の経理を担当、工場を回しながら担当、工場を回しながらの確認、出納帳の整理などにあたっていたが、三十歳代の一時期、経理を意識するようになった。数多く待ち受ける試練の中で、「老舗」とも言われた小田原屋の消費物製造業（小田原園）の経営を引き継ぐことになった。

赤城フーズ会長　松永　秀雄氏

（前橋市表町）



略歴

まつなが・ひでお　一九三五年二月、新田郡笠懸村生まれ。桐生工業専門学校化学工業科卒。五五年小田原屋入社、五八年専務、七一年社長に就任。九一年から会長に。関東漬物工業協同組合理事長、関東漬物協議会副会長、全日本漬物協同組合連合会常務理事などを歴任。現在は関東食品工業協会副会長、前橋広域商工会議所副会長を務める。県特産品に成長した「カリカリ梅」開発に当り日本農産加工協会賞を受賞。県漬物